国際医療福祉大学審査学位論文(博士)
平成 30 年度大学院医療福祉学研究科博士課程・論文要旨

題目：がん罹患が若年成人がんサバイバーの恋愛や結婚に及ぼす影響

保健医療学専攻・臨床心理学分野・臨床心理学領域
氏名: 山谷 佳子

キーワード：YA 世代,がんサバイバー,恋愛と結婚,妊孕性,カミングアウト,セルフスティグマ

１．研究の背景と目的

がん治療の進歩により，生活や人生を考慮したサバイバーシップへの取組みが重要となっている．近年では，ライフステージの違いでの対応やがん患者の妊孕性について注目され，第 3 期がん対策推進基本計画では，AYA 世代(Adolescent and Young Adult：15～39 歳の思春期と若年成人世代，以下 AYA 世代)のがんへの対策が必要であると新たに明記された．しかし，国内での AYA 世代がん患者の現状は十分には把握できておらず，対策が遅れている現状がある．堀部(2017)は，「AYA 世代のニーズは A 世代(15～19 歳)と YA 世代(20～39 歳)で必ずしも同じでなく，それぞれに配慮が必要である．大まかに 20 歳以降の YA 世代では，通常，意思決定は本人が行い，就労し，精神的・経済的に自立し始めており，次世代を産み育て，社会を支える世代である．そのため，主な課題は就労，家族支援や生殖機能温存である」と報告している．このように，AYA 世代は，今後の人生形成において重要なライフイベントに直面する時期であり，罹患や治療に伴いライフプランの変更を余儀なくされることも少なくない．特に YA 世代(20～39 歳)では今後の家族形成を考え，恋愛やその先にあると考えられる結婚と向き合う年代である．

本研究では，特に恋愛や結婚を意識するであろう 20 歳代から 30 歳代のがんサバイバーの恋愛への向き合い方に焦点を当て，がん罹患が彼らの恋愛行動にどのような影響を及ぼしているのかを探ることを目的とし，質的研究を行った．

２．方法

分析データ背景の説明：がん患者によるがん患者のためのインタビュー情報番組“がんノート”のインタビュー内容．がんノートとは，NPO 法人がんノートが運営する公開サイトである．「発覚」「告知」「治療」「後遺症」「家族」「妊孕性」「恋愛・結婚」「仕事(もしくは学校)」「お金・保険」「克服法」「失敗・反省」「医療従事者に求めること」「キャンサーギフト」「闘病中のあなたへ」のインタビュー項目を，インタビュアー(がんサバイバー)が，ゲストのがんサバイバーにインタビューを行う番組構成である．番組時間は 1 時間から 2 時間程度であった．

分析データ：がんノートの出演者の中から，インタビュー当時 YA 世代であり，恋愛や結婚について語っている未婚の男女 30 名のインタビューを分析データとした．上記のインタビューのうち「恋愛・結婚」それに大きく関わる「妊孕性」について語られた内容を分析データとして，質的帰納的分析を行った．

分析方法：若年性がん患者会のメンバーと，インタビュアーを含めた YA 世代のがんサバイバー4 名(男性 2 名，女性 2 名)に，データ分析協力者として参加を依頼した．

分析の手順： 1)分析協力者とともに逐語録を読み込み，切片化とラベリングを行い，概念を生成し，2)概念を本研究者が集約し，カテゴリーの生成と概念図を作成した．なお，カテゴリー生成内容の信頼性妥当性の確認のために，筆者を含めた心理学研究者 4 名による検討ならびに，質的研究

に関する指導，がん医療に関わる医療者や研究者からの助言を受けた．3)以上のデータ分析結果をデータ分析協力者と再度検証し，カテゴリー生成内容の確認作業を行った．

３．倫理上の配慮

筆者の所属機関の倫理審査委員会に打診し，助言を受けた上で，インタビューデータは，患者への情報提供を目的とし一般公開されているデータであり，それを二次的に分析した研究のため，倫理審査は必要ないと判断した．なお，がんノート出演時に，出演者と取り交わす出演契約書は，研究への二次利用の承諾を含めた内容となっている．

４．結果と考察

研究対象者の概要は，男女比 10:20，罹患時の平均年齢 23 歳，インタビュー時の平均年齢 29 歳であった．若年発症のため希少がんが多く，がん種は多種多様であった．分析の結果，概念 102 個，サブカテゴリー38 個，カテゴリー14 個が生成され，主軸となるコアカテゴリー**【恋愛や結婚への足かせ】**と，主軸に関連するコアカテゴリー**【妊孕性への影響】【交際相手との関係】【変化せざるを得なかった人生プランや人間関係】**の４つ側面に集約された．以下に，コアカテゴリーは**【】**，カテゴリーは＜＞，サブカテゴリーは「」でストーリーラインを示す．

治療による**【妊孕性への影響】**や，罹患当時や罹患後にできた**【交際相手との関係】**，がん罹患や後遺症によって**【変化せざるを得なかった人生プランや人間関係】**が存在し，恋愛への向き合い方に影響を及ぼしていることが示された．恋愛への向き合い方の変化には，健康を損なった事実や妊孕性への影響が自尊心の低下につながり，**＜がんになった自分に自信が持てない＞**心情が示され，セルフスティグマが生じるに至っていた．また，恋愛対象者に対してがん罹患経験や後遺症を伝える躊躇や，伝えるタイミングに関する**＜カミングアウトへのハードルの高さ＞**があり，**＜恋愛に一歩踏み出せない心情＞**が**【恋愛や結婚への足かせ】**となっていることが示された．その中で，恋愛に消極的になった者でも**「恋愛，結婚，出産を諦めたくない気持ち」**を持っており，カミングアウトのタイミングや言い方の工夫や**「恋愛対象を変更」**するといった対応を行っていた．さらに，時間の有限性を実感した者，容姿や日常生活に影響を及ぼす障害を持つに至った者の中には，恋愛に積極的に転じた者もおり，**「がん罹患経験や隠せない後遺症への捉え方の転換」**を図っていた．これらは，がん罹患により様々な問題を抱え，傷つき葛藤する中で**＜それでも恋愛をしていくための対処法＞**であり，直面している問題に対する視点や発想の転換を行うことで，がん罹患後の人生という新しい状況の中で恋愛に向き合い，年齢相応のライフイベントに適応していこうとしていると考えられる．

５．総合考察

YA 世代がんサバイバーにとって，がん罹患や後遺症による自尊心の低下はセルフスティグマにつながっていた．また，恋愛対象者に対するがん罹患や後遺症のカミングアウトについて複数のカテゴリーに関連して抽出されており，YA 世代がんサバイバーが恋愛や結婚に向き合う際に直面する大きな問題であることが示された．カミングアウト(自己開示)は，アイディンティティの形成や重要他者との親密性を築くといった発達主題の達成に深く関わり合っており，また，カミングアウトの達成がセルフスティグマの軽減につながると考えられた．カミングアウトにおける葛藤や試行錯誤は，社会に戻った YA 世代がんサバイバーたちが，がん罹患後の新しい人生に適応するための要所であり，セルフスティグマの軽減とカミングアウトの側面から YA 世代がんサバイバーの支援を考えていくことは，YA 世代がんサバイバーが生きやすくなる社会づくりの一助となると考えられた．